ローマで建築にふれる

岡北　一孝

建築は動かない。近年は、建築の展覧会が日本でも多く開催されるようになった。文化庁が近現代建築資料館を設立して10年になるし、つい最近では、20世紀アメリカの巨匠フランク・ロイド・ライトや誰もが知るガウディの展覧会はたいへんな賑わいで、島根県の益田であった建築家内藤廣の展示も抜群の見ごたえであった（会場の建築もすばらしい）。図面や模型がぎっしりと並ぶとはいえ、展覧会は建築を実際に体験することを提供してくれない。各地の建築との忘れられない出会いが建築の研究・教育でも重要なのは間違いない。

近年、建築教育の多様化は著しく、建築学部として独立することもあるし、芸術系の学部のみならず、文学部で建築学の教育・研究を展開するところもある。しかし日本では建築学は工学部の中に位置付けられることが主流で、建築家を筆頭とする建築技術者を養成する側面が強い。したがって、学問としては建築設計・計画や建築構造が中心を占めており、わたしが専門とする西洋建築史は、学生たちにはかなり遠いものに感じられるようだ。

恵まれたことに、勤務先の岡山県立大学の建築学科には「海外建築研修」という、建築や都市を巡見できる授業がある。学生は大学から補助金があるものの、それなりの金額を負担せねばならず、履修のハードルは低くはないが、昨年度の授業では20名の授業登録があった。2023年3月5日から13日まで、研修はローマを舞台に繰り広げられた。新型コロナウイルスの感染症対策もあり、フィウミチーノ空港でワクチンの接種証明をめぐって、係員相手に神経戦を展開したり、さまざまな困難に直面した1週間だったが、トル・ヴェルガータ大学建築史学科のスタッフの協力もあり、無事に研修を終了した時の達成感はなかなかのものであった。

わたしの専門や興味は別にしても、ローマは古代から現代までのひと通りの建築様式（ゴシックだけは難しい）に触れられる都市なので、西洋建築史の演習としては理想的な環境である。そこで実質6日間の日程の中で、時間軸に沿って2000年のスパンで建築を体験する計画を立てた。古代の遺跡群から始まって、アラ・パキス博物館で締めくくった研修は、学生にとって豊かで貴重な経験だったはずだ（と願う）。古代から時間を追う制約があるがゆえに、パンテオンを訪れる際にファルネーゼ宮殿の脇を通ることになっても、まるでそこは見るに値しないものかのように、何も言わずに通り過ぎるのは辛い瞬間であった。

面白いのは、日本からローマにいたるまでのさまざまな苦労が、学生を「この建築には素晴らしい価値があるに違いない」と思わせ、建築のエッセンスをなんとかして持って帰りたいと、彼らの感性を刺激したらしいことである。一番の典型例はブラマンテのテンピエットを訪れたときであった。それなりの距離を歩き、丘を登りたどり着いた先が、一見地味な小さな礼拝堂であったことに面食らった学生は少なくなかった。なぜこれがルネサンスの傑作なの？という感じであった。だからこそ、この建築には一体何があるのかと、精一杯理解しようとする姿勢が見えた。わたしの解説魂は燃え上がった。

そのほかにも、サン・ピエトロ聖堂の目が眩むような豪華さや鮮やかさ、中世の教会堂のスポリア（古代の部材の再利用）によるパッチワーク的な多様さは印象的であったようだ。彼らが柱や壁にそっと触れているのを見ると（当然それが許されている場合に限るが）、かたちや空間に加えて、素材の質感や艶、色彩も建築の欠かせない側面であることを再認識させられた。その経験は、わたしがずっと取り組んでいるルネサンス建築史研究を新しい展開へ導くこととなった。

ルネサンスは、建築創造の場で設計と施工がそれぞれ独立した仕事としてみなされ始める時代である。その分離は、建築家の最も大きな仕事が、建築図面を完成させることであるという見方さえ生んだ。建設を職人たちの集団的な事業ではなく、作家個人の才能の産物とみなすことで、かたちと素材、設計と施工、建築家と職人を二項対立の構図で扱うようになった。そしてルネサンス建築史研究の多くは、建築家が構想した建築のかたち（輪郭）と、その基盤となる各部の寸法と比例関係を主な研究対象としてきたように思える。かたちを成立させるための技術や建築の物質的側面は、副次的なものと考えられているのではないかと疑うことさえある。ルネサンスの建築現場では、素材がどのように選ばれ、細工され、接合され、磨かれ、彫られたのか、その物理的な実体が、当時の芸術表現や社会的な文脈においてどのように重要であったのだろうか。難しい問いではあるが、これからじっくり考えてみたい。